【54】

氏　名（本籍）	田　中　久美子（長 野 県）
学 位 の 種 類	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　4194　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**生成される信心** －佐賀県唐津地域における信仰の過程をめぐる語りと行為－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	真　野　俊　和
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	古　家　信　平
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	徳　丸　亜　木
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	好　井　裕　明

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は佐賀県唐津地域を研究対象地とし，さまざまな民俗宗教の実態をとおして，それらの宗教にたずさわる人々の信心，すなわち信仰する心がどのような行為と結びつき，生成されていくかを考察したものである。全体は序論，結論を含めて 7 章から成っている。

第 1 章「調査地域の概要」では民俗学の視点に即して，当該地域の宗教状況全般について述べた。ここで特に注目する必要があるのは，岸岳末孫（きしだけばっそん）の信仰と弘法大師信仰であるという。岸岳末孫とは戦国時代の末，当地方を支配していた波多家が没落した後，波多家の武将たちを祀るとする民間伝承である。この伝承は特定の場所や石造物と結びついて人々の中で想起されているが，その一方で岸岳末孫に関する語りかたが人によって様々であることから，個人の岸岳末孫との経験をみていく必要があることを指摘した。また弘法大師信仰に関しては，大師講が当該地域の集落ごとに存在しているが，これが高野山成福院の影響を強く受けて成立したこと，唐津地域の人々が福岡県にある篠栗新四国霊場と関わりを持ってきたことを指摘した。

第 2 章「神と対話する人々－唐津市北波多の岸岳末孫を事例として－」では，上記岸岳末孫を事例として，岸岳末孫が人々にとってどのような神であるのかについて論じた。岸岳末孫の祭祀者は，その石塔などが存在する土地の所有者であると一般に考えられているが，著者は岸岳末孫のお告げによってその祭祀者となる人も存在することに注目した。人々は，他人が所有する岸岳末孫に触れたり，石塔に書いてある文字を読んだりすると，その岸岳末孫がすがってくると考えている。そのため人々は岸岳末孫からお告げを受けないように，見て見ぬふりをして通り過ぎたり，それに触れないようにしたりする。逆に岸岳末孫の祭祀者となる人は，田畑を耕したりする中で，岸岳末孫と日常的な交流を持ちながら生活していることも認められた。著者はこういう祭祀状況を「神と人との対話」と表現する。岸岳末孫とは祭祀者との直接的な関係に限定されない広く人々に開かれた神であり，人々は岸岳末孫に積極的に関わったり，反対にできるだけ関わらないようにしたりするための方法，すなわち「神と人との対話」を日常的に用いることによって，自らの信心を作り上げていくものであることを示した。

第 3 章「講の変化とその対応にみる人々にとっての講－唐津市北波多 T 集落のお大師講を事例として－」

では，当該事例に基づき，講員たちが考える弘法大師講のあり方とはどのようなものなのかについて論じた。具体的には，大師講の変化とそれに対処する人々の行為に注目した。従来の研究において，講の変化は衰退など消極的な意味で捉えられることが多かった。しかし実態においては，高齢の熱心な仲間が講に参加できるように，講員たちは慣例からはずれて昼に行うことを認める一方で，反対にそれに参加できなくなる講員に対する種々の配慮をするなど，さまざまな工夫がなされているという。こうした事例をとおして著者は，大師講の内容を変えることは，講を続けるための積極的ないとなみであると考えた。すなわち人々にとっての大師講のあり方とは，それぞれの講員の信仰や生活との兼ね合いの中で，講員全員で行っていると考えることができる場をつくりあげていくことであったと，著者は主張する。

第４章「巡礼を構成する仲間－篠栗新四国霊場巡拝を事例に－」では，唐津市北波多徳須恵において，仲間を募って篠栗新四国霊場に巡拝する人々を事例とし，このような集団で巡礼を行うことの意味について考察した。巡礼者集団の内部は，山登りの仲間やカラオケ仲間など，日常生活における仲間関係によって構成されていたという。すなわち巡礼の集団は必ずしも信仰を重視して結集したわけではない。ところがこの仲間で篠栗新四国霊場を巡拝することによって，個々人の悩みなどの事情を互いに配慮しあうことが可能になり，人々は個人の願いや仲間の願いをかなえるための行為を行うことになる。自分は弘法大師を信仰していないと公言する男性でさえ，仲間関係に巻き込まれることによって，篠栗新四国霊場への巡拝を毎年続けている。このように人々の巡拝の動機はそれぞれであるが，日常における仲間となら信仰の場に入っていくことが可能になるという人々の心情に，著者は着目したのである。

第５章「語られる信心－他者の信仰への評価とその葛藤－」では，人々が地域の日常生活の中で，どのようにして自分の信心を確認していくのかということについて考察した。唐津市Ｏ集落における信仰的な行事に参加する女性たちは，基盤の異なる信仰を持っている。第一点は，Ｏ集落における大巡りなどの信仰的な行事を主催する，Ｐ寺の信仰を持つ坊守を中心とする女性である。第二点は，基山町に存在する寺の信仰を持っている女性たち，そして第三点は，特に宗教的な背景を持っていないが，大巡りに参加する女性たちである。これらの女性たちは自分たちが持つ信仰を背景としながら，信仰に関する種々のことばを自分なりに理解し用いることによって，自分の信心を表明したり，他者の信心を評価したりしていた。すなわち，人々は自分の信心を他者に表明することで，自分をＯ集落の信仰世界の中に位置づけ，自分の信心の居場所を確保するのであると著者はいう。

「結論」では各章で得られた知見をまとめ，本論文が民俗学の信仰研究において，どのような示唆を行うことができたかを改めて提示した。著者の主張は，信仰という心の営みが「岸岳末孫信仰」,「弘法大師信仰」などというあらかじめ決まった形の上で無条件に展開するのではなく，人々が他者との日常的な相互行為を通して自らの信心を確認することにより，はじめて可能になるのであるというところに集約される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，当該地域での７年におよぶフィールドーワークに基づく詳細な事実報告であるのみならず，野心的な理論構築を目指した意欲作といえる。第１章および第２章で詳述された岸岳末孫という習俗に関しては，早くから報告があり，学界においてもよく知られた存在であった。しかし研究の主流は，それを御霊信仰の系譜に位置づけるか，そこに特定の巫女など下級宗教者の介在を指摘するというように，外側からそれを観察し意味づけるという方向をとっていた。それに対し著者のとった方法は，それが人々によって信仰されている現場－著者はそれを「信心」という言葉で語った－に置き，詳細なミクロレベルでの検討を試みることにあった。その結果，たとえば当該地域における数多くの祭祀対象物のうち，どれが岸岳末孫であるかということについてさえも，人によってさまざまに異なる判断があることが明らかにされたのである。すな

わち，岸岳末孫信仰は「岸岳末孫」という語彙で一括されてしまう存在というよりは，当該地方に住む住民たちのさまざまな心意や状況に応じて立ち現れてくる現象であることが解明された。こうした視点は第３章以降でとりあげた，講や巡礼など他の習俗においても共通している。信仰習俗は実際に人々の心の中で信じられているのか，人々は具体的にどのようにそれを信じているのかという，最も根源的なところに問題を設定するという本論文の方法は，民俗宗教の研究に斬新な可能性を付け加えたということができる。

いっぽう，特定の事実をデータにしたがって客観的に記述していくのではなく，人の心の営みというきわめて抽象的なところに分け入ろうとする本論文の方法において，どのような表現，語彙や記述構成がふさわしいかという点に関していま少しの注意をはらい，より精度の高い議論が展開されることが望まれる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。